

派遣者番号	28J03	氏名	岡崎 伸一
研究主題 —副主題—	Development and Effects of Teaching Materials Used For Improving Listening Proficiency Through ICT For 7th Graders		
派遣先	千葉大学大学院	担当教官	西垣 知佳子 教授
所属校	品川区立荏原第六中学校	校長	佐藤 勝

キーワード：三ラウンド・システム理論、ICT、リスニング力養成

1 研究の背景（目的）

文部科学省による大学入試改革の話題を耳にする。今までの3技能に話す技能が加わり、4技能での試験が導入予定である。外部試験では、表現する際に聞くことがその前に要求される。すなわち、聞く能力なしでは表現できず高得点も望めない。

小学校での外国語活動は、外国語に親しむことに重きを置いて導入され、ある報告では態度面や進んで英語でコミュニケーションをとる姿勢などで、一定の効果も認められている。

中学校では、小学校で培われた素地の上に読む・書くことが求められ、脳科学の視点では、外国での成功した外国語教育は聴き取り訓練を最初から重視し、会話を重視した教育をしているという。中学校では小学校での素地を生かすべきであろう。

しかし、東京都の中学2年生対象の調査結果では、正答率が15.5%のリスニング問題があった。正答するには概要を捉える以上に詳細を聞き取る必要性があった。聞き取る力は伸びているとはいえ、弱点もあり、その改善は急務であり、中学1年から対処すべきであると考えた。

中学校での実態として、授業時間内の指導の実態調査の報告で、リスニングに関連する活動は、音読や教科書本文のリスニング、口頭導入、ディクテーション、そしてドラマや映画などの初見の英語を聞くことなどであった。玉井（1992）や高橋（2003）が以前に指摘した状態とそう違いはないようである。

2 効果を上げている指導法

そのような中、効果を上げている指導法があり、繰り返し効果が実証されているリスニング指導理論があり、「三ラウンド・システム理論」（三R）（竹蓋 1997）という。千葉大学で開発され、効果を上げている。大学生のみならず、高校生に対しても実証済みである。中学生での効果例も見られた。「三ラウンド・システム理論」とは、英語教育総合システムの構造を言うが、本研究では狭義での「効率的な聴解力の養成をするリ

ニング指導」のことである（図1）。

筆者は、この理論を活用した教材開発を共同研究（牛江、阿佐、岡崎、与那覇 2012）で行い、中学3年生を対象に実施した。また、中学2年生に対しても教材開発と試用（岡崎 2013）を行った。これらを踏まえ、本研究では中学1年生を対象に教材開発を試みた。

3 本研究の目的

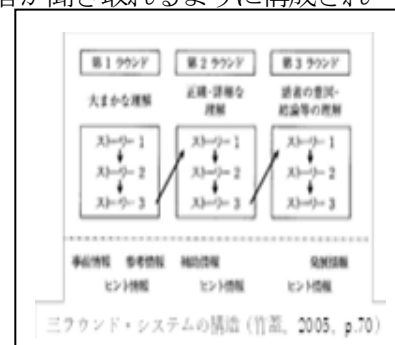
本研究の目的は、中学1年生を対象として、生徒のリスニング力を養成していける「三ラウンド・システム理論」を応用した教材を開発して、その有効性について検証することである。

4 教材開発

三Rの特長は、リスニングの目的を達成するまでに中間目標を設定し、3つのラウンドに分けて、それぞれのステップを踏むことで最終目的をスムーズに達成できるようにしている。そして、ラウンド内の様々なタスクを有機的に関連させることで、学習者が難なく最終目的を達成できるようになっている。聴解力育成のためのトップダウン処理、ボトムアップ処理、そして編集処理を促すものとなっている。しかも、音声素材はオーセンティックなものを使用しても学習者が聞き取れるように構成されている。

個人のペースで学習できることや適切な手順で学習できることを踏まえ、ICT機器としてパソコンの使用を決定した。

また、中学生になると電車を利用する機会が増える。そこで英語に触れる場として、電車内でのアナウンスを選定した。生徒たちにとって馴染みのある山手線と東急線と修学旅行での新幹線の3種類とした。



三ラウンド内のそれぞれのラウンドに目標がある。第一ラウンドでは文章の「大まかな理解」、第二ラウンドでは「正確・詳細な理解」、そして第三ラウンドでは「話者の意図・結論等の理解」である。最終目標の第三ラウンドを達成するために、第二ラウンドが存在し、第二ラウンドを助けるのが第一ラウンドなのである。

タスクを達成するために、5種類の情報が提示される。①「事前情報」は学習者の背景知識を活性化させる役割がある。②「参考情報」は必要に応じて使える辞書情報である。③「ヒント情報」は学習者が自力でタスクを達成できるように援助するものであり、考えの道筋などである。④「補助情報」はコミュニケーションの技術や異文化情報、文法的な解説も含まれる。⑤「発展情報」は教材と似たような場面やトピックで必要となりそうな補助的、応用的情報である。(教材内のタスクやヒント例は紙面の都合上割愛する。)

5 研究の方法

(1) 対象者

品川区立の7年生(中学1年)82名にプレ・ポストテスト、検証授業、アンケートを実施した。(不登校・欠席者等を除き、対応のある集団74名を調査対象とした。)検証授業は12月に9回実施した。

(2) 評価データ

①プレ・ポストテスト(客観的評価)

教材使用後の聴解力等の伸びを観察するためのプレ・ポストテストを実施した。テストはA～Dの4種類を用意した。Aは放送を聞き取り、メモするものを1問出題した。採点法は単語、語句、文レベルでそれぞれ点数化した。Bは単語を聞き取り、適切な語句を選ぶもので、4問出題した。Cは文を聞き取り、適する絵を選ぶものを6問出題した。Dは語句の整序問題を6問出題した。

②アンケート(主観的評価)

教材の学習後に5段階の等間隔尺度法を用いた印象評価と自由記述を組み合わせたアンケートを実施した。

6 研究の結果

(1) プレ・ポストテストの結果(表1)

教材使用前後に前述のテストを実施し、それらの平均点を比較した。それらの差についてt検定を行ったところ、結果は右表のとおりであった。Aタイプ(単語)以外のAタイプ(語句、文)、B～Dタイプで1%水準で、プレ・ポストテストの平均正答数

の差は有意であることが認められた。効果量においても同様であり、Aタイプ(単語)以外で効果量が認められた。それらの中で、Bタイプは効果量中であったが、他のA(語句、文)とBとDタイプの4種類で効果量大と確認された。

表1: プレ・ポストテストの結果とt検定の結果

Type	プレポスト (n=74)		ポストテスト (n=74)		t	Δ (効果量)
	M	SD	M	SD		
A (単語)	3.95	5.91	4.54	9.21	-1.67	.10
A (語句)	0.30	0.62	1.24	1.94	-6.30*	1.52
A (文)	0.70	0.60	1.35	2.29	-4.07*	1.09
B	2.16	0.74	3.07	0.69	-7.00*	1.22
C	3.98	1.94	4.98	1.30	-6.95*	0.52
D	1.21	1.30	3.25	2.36	-12.64*	1.58

Note. Δ=.50なら意味があるとみなします (Koizumi & Katagiri, 2007): |.20| ≤ small <|.50|; |.50| < medium <|.80|; |.80| ≤ large.

*p < .001.

(2) アンケート(主観的評価)の結果

前述の5段階の印象評価のうち、4と5を肯定的回答、1と2を否定的回答として分類した。それらのうち、「Step 1, 2, 3と進むにつれて聞けるようになった」の肯定的回答は87%、「聞き取りの力がついたと思う」が89%、「学習は楽しかった」が78%であり、成就感、満足感、継続学習意欲への評価が高かった。自由筆記での評価では、79%が肯定、18%が中立、4%が否定の割合であった。否定的な記述はパソコンに関するバグ等によるものであった。

7 研究の考察

客観的評価と主観的評価ともに全体的に肯定的な評価を得られた。その点では、本研究での目的は達成できたと言える。そして、大学や高等学校で検証されてきたこの「三ラウンド・システム」が中学校においてもリスニング力の養成ができ、実践が可能であると言える。そして、語順を問うプレ・ポストの結果からは、リスニング力のみならず、中学生ならば語順に関する点で伸びが確認されたことから、文法的な語順の点でも伸びていると示唆される。

8 今後の展望

本研究では、まだ課題もあるがその点を改善し、今後も生徒のリスニング力を養成していける「三ラウンド・システム理論」を応用した教材開発を続けていく決意である。

